
勘違いの産物～らぶらびりんす～

れみどれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勘違いの産物くらぶらびりんす

【Nコード】

N3360M

【作者名】

れみどれ

【あらすじ】

卒業式の季節。 一つの純粋な思い・・・

「・・・めっちゃ失礼なだけどさ」

「よかつたら付き合ってくれない？」

そう言ったのは、卒業式の前日

しかもパソコン越し。チャットでだった。

skype。みなさんご存知の誠に便利なツールを使い、彼はそう言った。

彼の名前は、零射。そしてその相手の名前は咲であった

「え・・・じょーく？」

平仮名打ちで相手がそう答える

平仮名、と言うかわいらしさが彼の心をくすぐった

んな訳ない。と否定すると、もう一度彼女は確認をした

「冗談だよね？」

と。だが零射は変わらず、違う。と言い続けた

そこから、沈黙が始まった

零射はその間、パソコンの前で一人冷や汗を流していた

「（いくらなんでも・・・急すぎたか）」

「（俺・・・終わったな）」

何故こうなった。彼は自問自答し、今一度振り返った

・・・そう、あれは卒業式の前日準備。 会場設計の時であった

「おい、ちよいクラスの女の子にランク付けしようぜ」

そう言ったのは零射のクラスの友達。 ノーブルであった

ノーブルと零射は互いに照れ臭い・・・と言った感じだが、親友と言つても過言ではない仲であつた

ただ、互いに少しばかり歪んだ趣味で共鳴したのは今となつては笑い話である

その歪んだ趣味の一つが、ノーブルの一言である

卒業式の式場準備。 彼らが当たっていたのは紅白幕の取りつけであつた

だがそれは二人の仕事が面倒。 ならば早く終わらせようと言つプラス思考で他の準備班よりかなり早く終わった

仕事が終わわり退屈したノーブルは指揮者が登る階段状の台に座つて零射にそう誘つたのだ

完全に二人の世界が始まつた。

基準は足。

スカートの下から覗けるそのシャープなラインは最高

特に黒のタイツに包まれたあれは・・・ と熱烈に二人は語つていた。

その結果、次々とランクを付けるノーブル

零射はそれに対して、半笑いで答えたり、共感したり・・・ と友人の話に対する普通の反応をしていた

だが、それはある一人の子をノーブルが指した時点で変わった

「やっぱ・・・咲かな。 余裕で上の上だ」

上の上。 それは、基準のランクの事である。

下の上、下の中、下の上・・・と。 ごくごく一般的なランク。

その中でノーブルは咲を最高基準にしたのだ
零射はその時、ひきつっていた

「・・・おい、どうしたし零射」

我に返った零射がいつも通りの笑顔に戻る
そして、ノーブルの判定を肯定した

その後も、二人は何人かを判定した後・・・ノーブルがいきなり飽きた。
と一言言った

そして続けて、とんでもない事を言い出した

「おっけ・・・。次は男verだな」

「?!」

と、いう事で今度は男を判定する事になった
まずは体育館を二人で出ると、彼らの友人二人が目止まった
一人は野球部のオン。そしてもう一人はカイ。であった
二人の手には大量のガムテープ。会場設計で使うのだろう

「てめーら・・・仕事は・・・」

オンがそう言うのとノーブルは自慢気にもう終わった。と切り返した
その後ろで何故かカイはニヤニヤしていた。
オンが舌打ちをして、俺らはまだ仕事だ。と言って体育館の中へ
と入っていく

その背中を見たノーブルと零射は、見事なハモリを利かせてある言葉
を言い放った

「上の上・・・」

そう、二人はイケメンだったのだ
まずはオン。彼は野球部・・・しかもキャプテン。と運動神経が
抜群

ついでに学年委員長も勤め、性格もよい。拳句の果てには年上の
彼女までいるモテ男。リア充なのだ

零射はそれを嫉妬感タツプリで、いつもネタにしていた
次にカイ。彼もイケメンである。

彼女は居ない・・・が運動神経は抜群

そして何より・・・彼にはユーモアセンス。一言で言うと面白いのだ
女の子から見ると、それはとても好印象。

が、男・・・零射やノーブルから見たらただの馬鹿であった

悩ましい事に、彼はモテたくもないのにこの学校一番の不細工とも
言える女子から好かれている

それを三人はネタにし、日々笑っていた

「次は・・・お前だ」

ノーブルがそう言う

そう、零射が判定の対象となったのだ
すかさず零射が口を開く

「余裕で下の・・・」

「自虐は無しだ」

肩に向け、思い切りパンチを入れる

丁度筋に入った、零射がぐあっ。とみっともない声を上げた

そしてノーブルが前髪をいじりながら零射の発言に対し、舌打ちを
して不機嫌そうに口を開きはじめた

「ばっか。お前は以外と・・・」

「おい、お前ら二人・・・」

零射にとって良い発言は、彼らの担任によつて遮られた
ノーブルは首根っこを掴まれ、思い切り握られていた

「手が開いてるなら、他の人をてっだえ！」

そう言つて、ノーブルが連れて行かれる

逃げてても無駄だ。二年間の担任との付き合いで零射は悟つていた
のか、大人しくその後を突いて行つた

その後、バック絵・体育館の絵を張る。とか言うのだが結局、
人数が多すぎて邪魔の為、零射・ノーブルは担任の監視の下、当日
吹奏楽部が演奏する場所の椅子で座っていた
その回りには徐々に女子も集まつてきていた

「ねー零射。髪の毛たつてるよー」

「ほっとけ」

零射の髪型は見事にキマつていた

ワックスでも付けてるのではないか？　そう錯覚させるほど髪型は
荒いものだった

整髪剤は付けて居ない。が、故意にやったものだ

多数の女子からもそれを言われるが、彼は朝寝坊して、急いで走つ
てきたら風でこうなつた

と、適当な答えを出していた

が、実は朝寝坊などはせず、登校時間の3時間前にはきっちり起

きていた

丁寧は朝シャンまでしてドライヤーで丁寧にセツトしたのだが、それを知られるのは恥ずかしいので、零射は適当に答えていたのだ。次第に集まってきた女子に髪をいじられ、零射はぐあああ。ともがいていた

「あー もっててもてじゃん」

そう言ったのは咲であつた

その瞬間、零射の動きが完全にとまり、足掻くのも完全停止した。僅か一秒ほど。はっと我に返った零射がほっとけ。むしろ助ける。と咲にそう言った

もう分かるだろう。完全に零射は咲に惚れていたのだ。それはいつごろか。。。零射が彼女と別れたあたり？

理科の授業で咲が自分の後ろになった時？

未だに理解、分からなかった。

なんとも言えない。・・が。ただ、好きになっていた。それだけである

「零射、いる？」

スカイプの着信音。 U・N・オーエンは彼女なのか。 が流れた

のは零射の告白から30分後だつた

沈黙は20分近くも続いていたのだ

零射がキーボードを素早く叩き、いる事を証明する

そして一度スカイプのウィンドウを閉じて、自分のブログへと向つた。心臓の高鳴りが自分でも感じられ、マウスのポインタが自然と揺れていた

）
）
）

オーエンの着信音がもう一度鳴る

それと同時に脈拍数が一気に上がった

ドクン・ドクンと波打つ心臓。それに反応し僅かに震える腕でマウスポインタを移動させた

スクリーンの下の方に表示される s k y p e の文字を二度クリックする

” 頼む・・・o k と言ってくれ ”

それだけを願ってクリック、・・・画面が開かれた。

同時に零射が一気にチャットの欄を見つめる

そこに書いてあった文字を見ると同時に・・・え？ と零射が言った

何度も何度も読み直す、そこに書いてあった答え。それは ” Y

e s ” でも ” N o ” でも無かった

「返事・・・明日でもいい？」

「直接の方がいいから・・・」

その言葉がそこに写し出されていた

キーボードを再び膝の上に置き、タイピングを始める

軽快な力チャカチャ音が終わると、エンターキーを二回叩く音がそこに響いた

一回目は変換の確定

そして二回目と同時にチャットが発信される

「ああ、分かった」

それを了解した零射がそう言うと、咲はうん。 と返事をした

その後、咲は風呂に入る。と言ってskypeからログアウトしたのだった・・・

「・・・う、うあああ集中できねええええ！」

零射が自室のベットの上で漫画を読みながらそう言った

漫画をバタン。と閉じ床にそれを放り投げた

すると放り投げた漫画・・・BAD BOYS 15巻の1ページがそこに広がった

そこに書かれていた一つのセリフ。

それは・・・

” 惚れた女の本当の幸せを考える ”

零射がそれを見ると・・・ふっ。と溜息と小さな笑いをそこに吐いた
本当の幸せ・・・。俺なんかで良いのだろうか。

不吉な事が次々と頭の中を廻る中、零射はコンポの電源を入れた
そこから流れる音楽。それはヒルクライムの春夏秋冬であった

「今年の春はどこ行こうか？ 今年の夏はどこ行こうか？」

その歌詞が響くと零射の心が少し和らいだ

いつか・・・いつかきつと・・・二人でデートとかもしたい

もし付き合ったら、俺もケータイかってメール漬けだな・・・

と、幸せの日々を想像している内に、彼は眠りについてしまった

翌日。 結果を聞ける、卒業式の日であった

卒業式の日にも関わらず、彼は早朝からPCを開いていた
そしてskypeを開く

咲ーオフライン

「・・・」

それを確認するとt w i t t e rを開き、今起きた。 と書き込む

すると零射は数々のb o tに返答された

ロボット

学校に行ってくる。 卒業式だ。 そう書き残し、彼はP Cを閉じようとした

その時だった

）
）
）

オーエンの着信音。 s k y p eを開く。

T h e n 禅：学校一緒にいかな？

その一言が追加されていた

僅かな期待は崩れさり、溜め息を吐く

ああ・・・分かった。 と了解の印を送り、彼は学校への準備をし始める

8：25分。 神社の前で。 それが決まると彼は家を後にした・・・

学校へ行く途中、神社で禅。 そして友人である紅が彼の元へと来た

そして、今の零射の状況は二人へと打ち開けた

二人は零射の友人で、小学校からの付き合いであった

だからこそ、零射は今の自分がどういう状況なのかを説明できたのだ

「昨日さ・・・咲に告白してみた」

禅がニヤニヤしながらそうか・・・と答える

零射がそれを見ると、維持を張って必死にフラれる前提の話をしたこれは、フラれた時の言い訳。俺が言った通り、フラれたる？と言った感じでイジられるのを逃れる為であった

「くそっ・・・俺の中で90パーの振られる・・・って心と10パーのもしかしたら・・・って言うのが戦ってる」

と、意地を張るが、実際はほぼ確実に告白がokされる。　　と思い込んでいた

直接の方がいい。　　つまり、直接ok。と伝えたい

と言う事だろう。　　と勝手な想像をしていたのだ

だが、彼の友人らもそれには反対はしなかった

むしろ、直接お前に無理。　　って言うのもおかしいわな。

と零射を応援するが如く、そう言う始末である

学校へ着くとすぐさま零射は辺りを確認した

・・・咲がどこにいるか？

何故だ。　　学校に行く前までは咲に一刻も早く会いたい。

その気持ちが強かった。　　だが・・・今となっては咲と会いたくない

これが・・・照れか・・・　　と零射が自分でも気持ち悪い感覚に襲

われていた

「あ、咲だ」

友人の紅がそう言う。　　それと同時に零射はごく自然な風に視線を

外側に向けた

見間違いだった。　　その言葉を聞くと同時に、視線を前方へと向けた

外靴から上靴に吐き変えると同時に、零射の左足が紅の左わき腹に

直撃した

ぐふっ！　　とベタな声をあげ、わき腹に手を押さえる

紛らわしいんだよ・・・！　　と照れながら零射は一人で教室へと向っ

た．．．

卒業式。 本当にめんどくせえ

零射の隣からその眩きが聞こえた

卒業証書が授与されている時であった。

式も終わりへと近づくにつれ、卒業する三年生の表情が歪んでいった

．．．涙を流すものは当然いた

何故涙を流すのか。 それを零射は来年身を持って知る事を悟っていた

そして、式は終了した。

卒業生が一斉に起立し、列となって体育館をゆっくりと歩く

普段厳しい表情しか見せない先生もつい涙を見せてしまっていた

それを零射は物珍しげに半笑いで見ていた

そして卒業生の行列を追う様に目線を移動させた

体育館の入り口近く．．そこには10名ほど二年生が居た

卒業おめでとうございます。 一人一文字を持って、それを提示していたのだ

その一番端．．丁度零射の真後ろ辺りに居たのはなんと咲であった

「（へえ．．咲も持って．．）」

咲の顔を覗いた

その時、零射は啞然としてしまった

咲の顔には．．涙が浮かんでいたのだ

咄嗟に零射は前を向いてしまった

「（っ．．．?!）」

惚れた女の涙なんざ見たくない。彼のナルシスト的な何かが反応してしまっただ

そこからは目線をずっと下へと向けていた……。

式が完全に終了すると、二年生は三年生へと椅子を運んでいた

教室は涙の大洪水で二年からすれば気まずい以外の何者でも無い

その中、零射は少ない知り合いの中で椅子を渡した

普段、お世話になった先輩も涙を流している

零射が人に見せたくない表情の一つ。それは泣き顔。それは逆

に見たくもなかった。

その中でも特に……女性のであつた

「っ……。 やれやれ……。今日は嫌な日だ」

そう言つて、彼は教室へと戻つた

その後、片付けをし最後に外で三年生を見送つた

見送りが終了すると、零射らクラス一同は担任に集合を掛けられた

玄関で呼び出される中、クラスメイトの中にはブルブルと足を振る

わせ、文句を垂れるものも居た

そんな中、簡単な学活を終えると二年生らも下校し始めた

「さあ……。帰るか……。ん？」

ちよつと待て。咲からの返答がまだ聞いていない

辺りをもう一度見回す。が、咲の姿はどこにも見当たらなかった

零射がハッ……とすると額に手をあて。 あーあ……。と声を上

げた

完全に思い出したのだ、アレは三日ほど前の教室での会話だった

「私、卒業式の日隣町いくんだよねー」

「で・・・返事よりも遊びを優先されたと？」

半笑いで禅が零射の家でそう言った

そこには零射・禅の他に紅、そして蒼紅、カイト（この二人は兄弟）が居た

零射が会長の不気味（阿呆）な会

何故、上手いものをわざわざ不味く食べる必要があるのか？ の会であつた

会のメンバーから臨時に200ほど徴収し、その金を使って、リポビタンやら何やら不気味な物を使って不気味な物を作る会であつた
もちろん、それは全部頂く。

頂くルールは様々だが今日は懐かしのマリオパーティー4のミニゲームで飲む事を決定された

禅と紅はチームでやり、その他は単体でマリパとなっていた

2Lほど出来た悪魔のドリンク（栄養剤多数＋CCレモン＋レモンティー＋とんこつラーメンの汁）

結局、これの3分の1ほどは禅が飲む事となつた（飲んだら発狂したのであつた）

悪魔のドリンクを飲み終わると零射が一言呟いた

「外いかね・・・？」

この時、零射にはある考えが浮かんでいた

時刻は5時ほど。 適当に外を徘徊しようぜ。 などと言って駅へ行く
そうしたらもしかしたら、咲と会えるかもしれない

そんな小さな陰謀を隠し持ちながら、零射がそう言った

メンバーはえゝなどと苦い声を上げるが、零射がいいから！ と言

つて無理矢理外へと連れ出した
その時、蒼紅が零射へと近づき一言呟いた

「……咲んとこいきたいんだろ」

ニヤニヤしながらそういう
マズイ……こいつにはお見通しだったか。と言った表情をして零射
は全てを諦めた

「ああ……その通りだよ」

腰に付けた、シザーバックからキシリツシュガムを一個取り出し、
蒼紅へと投げつける

口止め量と言わんがばかりに渡すと、ふっ……と笑って蒼紅は銀紙
をはがしてガムを口へとした
自然と駅へと歩く……丁度その時、咲が向った町からの列車が到
着した

「……おい、カイト。お前確認してこい」

近くの歩道橋から、蒼紅がそう言う

カイトは何を？　と言わんがばかりの表情だが、蒼紅がいいから！
と背中を押した

遠くの歩道橋から、虚しく走るカイトの背中を見て、零射、そして
蒼紅と禅はそれを見ていた
その時であった

「……やめた」

零射がそう言う

ああ？ と蒼紅が声を上げた

冷静に考えるよ。 と零射が言う

これって一種のストーカーじゃねーか・・・。

と零射がようやく冷静になった

カツカツ・・・と駅とは反対側へ歩道橋を歩き始めた

蒼紅がはぁ・・・と溜息を吐くとカイトに手で戻ってこい。 の合図を出した

カイトが不満げにそれを見つめると、もの凄いダッシュで歩道橋へと来た

男達は・・・ ゆっくりと歩道橋を降りていったのだった・・・

後々、咲のブログを見た所帰ってきたのは6～7時ほどだったのでどの道会えなかった訳だが・・・

それはカイトへ伝えないほうがいい。 零射はそう思っていた

月曜日・・・

決戦の日とも言えるその日。 零射は妙に緊張していた

新しい靴を買った為、それを持って学校へと行った

その途中では禅とも出会い、一緒に登校していた

二人はiPodで音楽を聞いていた故か、会話数が少なかった

こんな所を蒼紅に見られたらどうなる事やら・・・（一応生活実行委員長であつた）

そんな事を思いながらも、二人は学校へと到着した

学校へ到着すると、卒業式の日と同じ様に零射は辺りを見渡した

・・・が、居る気配はなかった

何故か安心してしまった零射は教室へと入った

荷物を置き、廊下へと行く

オンとノーブルの元へと行くと、まっさきに笑われた

何故か？ それは靴の事である

「ニアワネエー。　かわいいぞ、零射」

白黒灰のチェック柄のコンバース。　オールスターの靴を彼は履いていた

うつせえ。　と零射が言う

続けて、これと虹色の靴しかなかったんだよ。

と苦し紛れの言い訳をした（実際に虹色の靴があったようだか・・・）

その時、咲が登校してきた

二人の視線は合う事は無かった

いや・・・零射があわせなかった・・・とでも言うべきか

そんな表情を見ていたオンは、とつくの間に零射が告白した。　そ

の事を気がついていて

だが、何も言わなかった・・・　それはオンの優しさであり、彼の

イケメン度の表れでもあったのだ

「・・・」

休み時間の度に辺りを確認する

返事はまだ来ない。

咲は俺の所へと近づいてこない。

咲の回りには・・・いつもあの女がいるな

と、咲の動きを完全に見ていた

ただ、バレないようにチラチラと。　他所からみたらまるで覗きである

咲にくつついている女・・・それは零射の前の席の女子であり、零射の班と一緒にであった
そして、給食の時間。零射はその女にストレートに聞いて見る事にした

「なあ・・・お前、しってんのか・・・俺の・・・その・・・」

ストレート。とは言いつつもさすがにそこまでは言えなかった
察してくれたその女は、知ってるよ。相談に乗ってあげているもの。と言った

何か余計な事を言ってくれていないだろうな・・・と不安を募らせながらそうか。と零射は返答したのだった

給食も終わり・・・五時間目

五時間目も終わった。そして・・・帰りの学活であった

その時、僅かにざわつく時がある

荷物を鞆へと仕舞うのだ

そのざわざわの中、零射はある事に気がついた

「・・・たく。新しい靴はこれだから」

靴紐がほどけていたのだ

それを見た零射は、座りながら前へとかがみ、靴紐に手を掛けた
右足の靴紐を縛る・・・縛り終わると同時に、舌打ちをした
左足もほどけていたのだ。

そして左足の靴紐を縛ろうと、左足を上げた時
トントン。と二回肩を叩く感触がした

「・・・ん？」

顔を上げる。その先に居たのは・・・咲だった

「ナイツシユー！ やっぱ先輩うまいっすねー！」

「ん．．ああ．．．」

3Pラインよりちょっと後ろ。 体育館のバスケットコートでシュートフォームを整えていた零射は後輩にそう言われた

正直、後輩に褒められた所で何にもならないのだが嬉しい事には間違いなかった

が．．今の彼はそんな感情はなかった
ただ、咲の事だけが頭をめぐっていた

あの一言。 たった一言で．．ここまで俺の心を動かせるものなのか？

不思議、今までに感じた事のなかった感情だけが零射を襲っていたボールが手に渡る。 ジャンプ。 そして手首を倒し、スナップを利かせる

スパツ。 綺麗にボールがネットへと包まれ、床へと落ちた
また、3ポイントである

「・・・あの一言だけで・・・か」

ボールが手に戻ってきた
そして、ジャンプ
手首を捻らせる

スパツ・・・

「ふん・・・」

3ポイントが3連続で入った。
零射はこの時、不機嫌そうな顔でボールを拾った
そしてシュートフォームを作る
ジャンプをし、手首を捻らせるその時であった

「・・・皮肉なもんだ」

スナップが効き、ボールが手から離れる
綺麗なフォームとは言えないが、しっかりとボールは飛んだ
綺麗な弧を描き、ゴールへと近づく

「気分が曇ってる時に限って・・・」

「シュートが入りやがる」

スパツ・・・。

（後書き）

この小説は、ふらどれの実話をほぼ100%トレースしたものです
吐き気がした方は、早くトイレへどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3360m/>

勘違いの産物～らぶらびりんす～

2010年10月8日23時17分発行